

## サラリーマンの職業的引退と その後のライフスタイル研究

—— 望ましい引退準備と引退後の意識のあり方を探る ——

多くの社会的な調査では、サラリーマンにとって大きなライフイベントである定年退職、その後の再就職、そして職業的な引退の過程で、仕事や会社を介して長年培ってきたネットワークや役割意識・帰属意識・社会的な地位を失いながらも、引退後の生活については、多くの方々が「自由な時間が増えた」「仕事のストレスから解放された」といった肯定的な認識を持つことが報告されています。

しかしながら、個々の職業的引退者が、どのような状況・意識を経て、充実した引退後の生活を獲得していったのかというプロセスについては、まだ正確にとらえられていないのが現状です。また、その一方で、充実した生活を獲得できなかった方々もいるはずですが、その実態やこのような転帰をたどるにいたったプロセスは明らかになっていません。

ダイヤ高齢社会研究財団では、職業的引退後の方々の生活や心理の状況を明らかにすべく、2006（平成18）年よりその背景や経緯等の調査を実施してきました。

### はじめに

—— テーマと目的 ——

研究の具体的なテーマは、「大企業退職者において、『その現役—退職—職業的引退過程における労働状況・家庭状況及び個人的な心理・活動状況が、引退後

のライフスタイルにどのような影響を与えたのか』を明らかにすること」と設定した。実際に職業的引退（以後、単に引退と記す）をされた大企業の退職経験者の方々へのアンケート及びインタビューによって、引退前の状況や心理と引退後のライフスタイルとの関係から引退準備や引退後の意識のあり方を探りたいと考えた。

ライフスタイルという言葉は、広く生活習慣や個人の生活上の諸活動の様式を意味するが、ここでは引退者が失った職場に関係した交流活動に代わる対外交流活動に焦点を当てた。

### 調査の具体的な方法

—— 対象者像とアンケート内容 ——

当財団が企業退職者の社会参加を促すためのモデルとして設立した集団であるDAA（ダイヤ・アクティブ・エイジング）の会員の中から、DAAへの参加時の年齢が64歳以上の13名を年齢層別に無作為で抽出し、協力が得られた有配偶者の男性高齢者11名を調査の対象として、2006年9月から2007年2月にかけて、自記式アンケートと半構造的なインタビュー調査を実施した。11名の回答時の年齢は68～82歳（平均74.6歳）であった。

DAAの会員は大企業の管理職経験者が多く、経済的には企業退職者の一般的なモデルとは言い難いが、本研究では引退後のライフスタイルとそれに影響する

表1 アンケート並びにインタビューの結果（抜粋） 上下の並び順は生活志向と外出頻度による

項目	アンケート結果から						インタビューから		生活志向を示す発言、または行動	引退後の活動の表現
	定年退職時年齢	引退年齢	引退前就労期間	現役時妻との夕食頻度	引退前の勤務状況	引退後新規活動数	引退後外出頻度			
単位または説明	(A) 歳	(B) 歳	(B-A) 年	40、50歳台平均回数/週	1:不定期 2:週2日 3:週5日定時 4:週5日残業	対象は定期的な対外活動 個 日数/週		引退時の心理や引退前の行動の話から	引退後の生活の話から	
A氏	60	60	0	1	4	0	1~2	引退生活に憧れた	自由を満喫した	
C氏	64	64	0	1.5	3	4	1~2	縛られるのは嫌だ	マイペースだった	
E氏	60	62	2	2.5	3	2	1~2	暇が嬉しい	趣味で忙しい	
J氏	55	65	10	3	4	3	1~2	再就職先でも意欲的	忙しい日々を送った	
D氏	60	63	3	1	3	1	2~3	前向きになった	外出が多く忙しかった	
I氏	55	65	10	2.5	3	1	2~3	やることがある	週に3日予定がある	
K氏	53	63	10	2.5	3	4	2~3	肩書きに未練はない	予定で埋まっていた	
H氏	59	72	13	2.5	2	3	2~3	積極的になった	仲間が楽しい	
G氏	61	62	1	3	3	2	3~4	前向きに取り組む	いろいろやって良かった	
F氏	57	70	13	2.5	1	2	3~4	自力で再就職	毎日忙しかった	
B氏	56	70	14	0.5	3	4	4~5	前向きに考えた	やることが多く忙しい	
平均	58.18	65.09	6.91	2.05	—	2.36	2~3			

\*基礎的項目から定年退職、引退の各年齢と定年から引退までの年数（引退前就労期間）、現役時代の状況から妻との週当たりの夕食回数（いかに会社中心の生活をしてきたかの目安）、引退前の状況からは勤務状況、引退後の状況からは新しい定期的な交流活動の数と週当たりの外出日数をアンケート結果から抽出し、引退後の生活志向や実際の生活ぶりを示す発言等をインタビューの逐語録から抽出した。

精神的な問題に着目しているため、調査対象として適当と考えた。

アンケートの項目としては、①基礎的項目（年齢、学歴、最高職位、結婚年齢、子どもの数等）、②40、50歳台の現役時代の状況（妻と夕食を共にした頻度、子どもの学校行事への参加頻度、会社以外の地域や趣味生活の位置づけ等）、③引退前の状況（定年退職年齢、家庭状況、勤務状況、引退に向けての意識・感情、体調）、最後に、④引退後の状況（引退年齢、家庭状況、体調、心理状況、従来及び新規の定期的な対外活動や交流先、定期的な対外交流のための外出頻度）、で構成した。

なお、ここでいう職業的引退は「報酬を目的とした仕事を完全に辞めること」と定義した。また、外出頻度の対象には、対外交流を目的としたものに限定し、散歩や買い物は含まないこととした。

11名の方々には、アンケートの回答をいただいた上で、現役時代、引退前後における具体的なエピソード、生活行動の内容、家族の対応、周囲の反応等の事象について、約1時間のインタビュー調査を実施した。その逐語録を起こし、対象者ごとに、発言の中から、具体的な行動や状況、行動の背景になっている考え方、意識の一端を示すような内容を選び出し、それらを時期や主体者、行動の対象別に整理して、引退に関わる行動や意識の構造を明らかにする作業を行い、共

通の、または個々の特徴ある構造の抽出を行った。

## 調査結果より

### —引退前の働き方・心理と引退後の生活志向の影響—

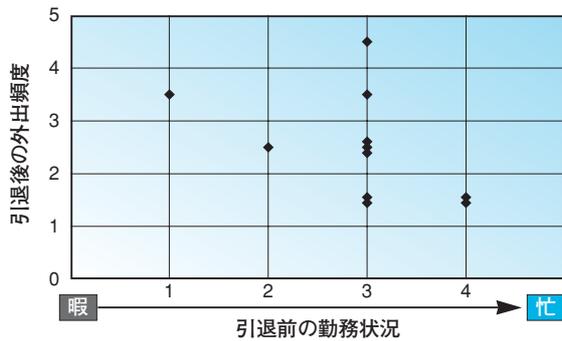
#### ●引退前の働き方や心理と引退後の対外交流活動

引退前の勤務状況では、週5日出勤でよく残業もしていた人が2名、週5日出勤で定時帰宅が多かった人が7名、週2日程度の出勤の人が1名、数ヶ月に数週間といった不定期な仕事をしていた人が1名いたことがアンケートからわかったが、このデータと引退後の外出頻度には強い相関が見られ、引退直前の働き方と引退後のライフスタイルに関係があることが示唆された。（次ページ〈図1〉参照）

全員が、インタビューで「現役時代は会社・仕事中心の生活を送っていた」と述べており、アンケートの回答においても40、50歳台の現役時代に妻と夕食を共にした頻度は、全員が週に3日以下、つまり土日を除くと1日以下であったことが示されており、先の発言が裏付けられている。しかし、この妻との夕食頻度と引退後の外出頻度のデータの間には強い相関が見られなかった。

次に心理面においては、引退を自ら決意したり、知らされたときに、新たな生活に向かう不安感などの心理的な問題を経験した人は見られず、実際に引退した

図1 引退前の勤務状況と引退後の外出頻度の関係



\*外出頻度は2～3日の場合は2.5のように、中間値でプロットした。

表2 のんびり志向と前向き志向

生活志向	対象者の内訳	定年から引退までの年数	引退後の活動	引退後の対外交流頻度
のんびり志向	A、C氏	ともに0年(即引退)	マイペース	ともに1～2日/週
前向き志向	B、D、E、F、G、H、I、J、K氏	1～14年(平均8.4年)	積極的で忙しい	平均約3日/週

ときの意識でも、自由・嬉しい・悠々自適になれる等の肯定的な評価が6名、肯定的、否定的のいずれにも判断ができない人が5名で、否定的な評価の人はいなかった。また、これらの意識の差が及ぼす引退後の対外交流等への影響を見つけるには至らなかった。

### ●引退後の生活志向による分類

インタビューで、「引退後にはのんびり・自由になりたい」といった意味の発言をした人が2名いて、この2名とも引退後の生活が「自由・マイペースだった」と述べており、定年退職後に即引退という選択をしていた(定年即引退を選んだ人は他にいない)。また、この2名は引退後の外出頻度が、今回の11名の結果の中ではもっとも少ない1～2日/週であり、1名は引退後に新規の定期的な活動を開始していなかった。(前ページ〈表1〉参照)

一方、インタビューの中で、引退後への心構えとして、「前向き・積極的」と述べたり、引退前の行動について積極性を感じさせる話をした人が9名いて、そのうち8名は、「引退後も忙しかった、予定が多くあ

った」といった述懐をした。また、この9名全員が引退後に新規の定期的な活動を増やしていた。(前ページ〈表1〉参照)

上記のような特徴を持った2つの分類を「のんびり志向」「前向き志向」としてまとめると、〈表2〉のようになる。

## 考察

—引退への準備期間と引退後の生活志向に着目—

当初あると予想した、現役時代の働き方や家族への配慮・引退時の意識と、引退後の対外交流の関連性は見られなかった。しかし、定年退職から引退に至るまでの期間の勤務状態と、引退後の対外交流には一定の傾向が見られた。そこから、現在はまだ一部の調査を終えたのみで断定はできないが、以下の仮説が考えられた。

「引退直前の仕事が忙しいと、引退後の定期的な対外交流のための外出頻度は少なくなる」

その理由としては、引退直前において職業生活が忙しい場合、仕事を失う過程を体験できないので意識の切り替えが進みにくく、引退後の生活への心理的準備が遅れるためと考えられる。

また、「のんびり」「前向き」といった引退後の生活志向による分類で見ても、〈表2〉で示したように、引退時の選択や引退後の対外交流頻度に特徴があり、両者の間に引退後の対外交流を含めた行動の在り様に差異があるように思えるが、詳しい解析にはもう少し時間を要するので今後の課題としたい。

## 最後に

本研究では、この対外交流の状況が、引退直前の勤務状態に関係する可能性を示唆することができました。しかしながら、研究は端緒についたばかりで、まだまだ調査数は少なく、今後の展開に負うところが大きいと考えられますので、今後は調査対象をさらに40名増やすことを目標にして、企業退職者の職業的引退後の生活に関わる調査を継続する予定です。

(主席研究員 西村芳貢)